

「信頼」の行方

—〈原子力〉と子どもの本—

長谷川 潮

一、二つの未来図

「原爆原発、一字の違い」という表現があるようだ。危険であることは原子爆弾も原子力発電所（原発）も同じという意味らしいが、このことが日本人以上に身にしてみる人間はいないはずだ。日本人だけが両方の被害を体験し、さらにビキニでの水爆実験による被害までも受けているのだから。一九四五年八月六日の広島原爆、同じく九日の長崎原爆で、日本人は初めて〈原子力〉に出会った。一九五四年三月一日には、南太平洋で操業中のマグロ延縄漁船の第五福竜丸などが、ビキニ環礁でのアメリカの水爆実験によって被曝した。原子力による三度目の被害である。そして四度目が福島第一原発における（3・11）ということになる。

第五福竜丸が被曝した翌日の三月二日、二億三五〇〇万円原子炉築造研究費を含む原子力予算が国会に提出され、日本は原子力の非軍事的利用への道を歩みはじめた。この〈非軍事的利用〉という表現は、一般的に使われている

〈平和利用〉ということばの代わりに使ってみるものである。3・11の後では〈平和利用〉はいかにも白々しいからだが、〈非軍事的利用〉にしても十分に適切なものではない。さて、その〈非軍事的利用〉としての原発の最初のものとして、茨城県の東海原発1号炉が一九六五年に発電を開始した。原発はその後増加しつづけ、最大時には全国で54基に達した。日本は原発大国の一つである。

日本の児童文学（子どもの本）は、以上のような事情とどうかかわってきたかを概観するのが本稿のテーマだが、最初に、いぬいとみこの『光の消えた日』（岩波書店 一九七八）に触れておきたい。この作品の「おわりに」で、いぬいは次のように言う。

一九四五年四月から翌年の三月まで、山口県柳井町の小さな戦時保育園で、私が子どもたちとすごした日々のは、だれからも忘れ去られていました。しかし八月六日の早朝、子どもたちと見てしまった「閃光」が、私には忘れがたかったのです。